

【書評】

日本統治下の台湾と沖縄出身教員

Taiwan under the Japanese colonial government and Teachers from Okinawa

石原 嘉人

Yoshihito ISHIHARA

0. はじめに

今年（2019年）の9月6日から11月4日まで沖縄県立博物館で「台湾～黒潮でつながる^{とうない}隣ジマ～」という企画展が開催される。展示資料の一つに、安村賢祐氏が2012年に著した『日本統治下の台湾と沖縄出身教員』の資料部分¹⁾をデジタル化し、該当する教員の親族等が過去の活動歴を遡って当時の情報を検索するという企画があり、そのデータの入力作業を筆者が担当した。デジタル化されたデータは、現在台湾で公文書として保存されている日本統治時代の資料とリンクされ、会場内で閲覧することが可能になる予定である。

入力作業を進めるうちにこの資料が日本統治時代の台湾における沖縄人の位置づけを示す記録として貴重なだけでなく、戦前の日本語教育の進捗を示す重要な資料でもあることに気づいた。拙稿は、琉球と台湾を巡る歴史の中で進められた日本語教育の展開の中で、特に台湾原住民族²⁾との関係に重点を置き、この資料に解説を加えつつ読み解くものである。

1. 日本統治以前の琉球と台湾

まず、琉球と台湾が日本の版図として組み入れられた経緯を整理しよう。

1871年、宮古島の貢納船が首里王府からの帰路、暴風に巻き込まれて遭難するという自然災害が事件の発端だった。台湾南部に漂着した琉球人はパイワン族の部落でいったん保護されたが、密かに逃亡したため敵と誤認され、うち54名が殺害された。これを奇貨とした明治政府は清国に対して抗議し、「現地は“化外の地”であり、清国政府は責任を負わない」という言質を引き出した。それを口実に1874年に現地に出兵してパイワン族居住区を襲撃し、そのまま台湾南部に居座った。これを牡丹社事件³⁾という。

これら一連の事件について琉球王府の頭越しに外交交渉が行なわれ、日清両国互換條款が結ばれた。この文書内の文言に示された「日本国属民」に琉球の民が含まれると日本政府が解釈したことが、の

1) 台湾総督府が発行した『職員録』の本籍欄をもとに、沖縄出身教員（正教員、非正教員一千百余名）、中等教育機関・高等教育機関関係教員を漏れなく抽出して、『旧植民地人事総覧』（全6巻）、『台湾総督府文書目録』（全27巻）、台湾教育会雑誌（全11巻）で補足した資料。安村2012の第三部（p173-486）では年度ごとに学校単位に整理されており、学校には当時の住所が付されている。

2) かつて蕃人と呼ばれ、のちに高砂族と呼ばれるようになったオーストロネシア系の諸民族の総称。現在16の民族が認定され、台湾総人口の約2%を占めている。彼らは「我々こそがこの島の 원래の住人である」という主張を込めて「原住」民族を名乗り、奪われた伝統文化を取り戻す努力を重ねている。2016年に蔡英文が台湾統治者として初めて過去の不平等な扱いを謝罪したが、土地問題などいまだ未解決の事案も多い。

3) 牡丹社事件については、これまで1871年の漂流民殺害事件から1874年の西郷従道による軍事行動までが一つの事件として扱われてきた。しかし、前者が当事者間の偶発的な事件であるのに対して後者は国家戦略に基づく軍事行動であり、それぞれを別の事件として捉えるべきである。平野2019によると、近年、事件の当事者である沖縄県民とパイワン族の両者から歴史の見直しを訴える声が高まっているという。

ちに「琉球処分」を押し進める根拠となったのである。

事件現場である屏東県の各地には、現在もこの事件に関する碑や掲示などが多く残されており、台湾と日本及び沖縄に関わる歴史の結節点として重要視されている。以下の写真はその一部であり、いずれも筆者が現地で撮影したものである。



牡丹社事件の概要を時系列に沿って紹介するため、道路沿いに数多く設置された巨大レリーフの一つ。西郷従道が軍を率いて上陸した場面が描かれている。



大日本琉球藩民五十四名墓。事件後に西郷従道が出兵の正当性を主張するために設置したものである。現在に至るまで地元の篤志家が管理維持しており、犠牲者の遺族との交流イベントがここで行われている。



牡丹社事件紀念公園の敷地内の説明版の一つ。中国語・英語・日本語が併記されている。

牡丹社事件に衝撃を受けた清国政府は、台湾へ軍を派遣して原住民族に対する支配力の確立を試みた。その結果、ジェノサイド的行為を伴う虐殺事件が各地で引き起こされた。その典型的な例として1878年に宜蘭においてクバラン族とサキザヤ族の居住地を清国軍が攻撃し、多大な犠牲者を出した加禮宛事件が挙げられる。

筆者は花蓮市郊外にあるサキザヤ部落を訪れた際、彼らの歴史や文化を紹介する多数のレリーフが部落の入り口付近の塀に掲げられているのを目にしたが、そのうちの一枚に、注目すべき重要な儀礼の由来が描かれていた。



サキザヤ部落の壁に描かれているレリーフ群

それは、サキザヤ族が民族的アイデンティティを確認する上で最も重要な儀式である「火神祭」の由来を説く図柄である。彼らが140年前に民族絶滅の危機を体験し、虐殺から生き延びて流浪した記憶を共有するための儀礼を今も行っているということが、このレリーフに示されていたのである。サキザヤ族の人々は清軍の追捕を恐れて避難先ではアミ族を装って暮らしつつ、こうした儀礼を秘密裏



火神祭の由来である虐殺事件について説明しているレリーフ

に行っていたという⁴⁾。

清軍は同じ1878年にアミ族居住地域である港口（アミ語でCepo'）でも、抵抗勢力に対して大規模な虐殺を行った。東海岸の北回帰線付近に位置する港口部落は典型的なアミ族部落の一つであるが、筆者はそこでCepo'事件の記念碑と対面した。



Cepo' 事件の発生現場に建てられた記念碑を示す案内板



Cepo' 事件の概要を示した石碑

4) サキザヤ族は逃亡の末、アミ族に庇護された。その後の日本統治時代から国民党独裁政権下にかけては偽ってアミ族を自称していたが、その後の民主化の進展に伴って民族性の回復を主張し、2007年に台湾政府によって13番目の原住民族として認定された。加禮宛事件でサキザヤ族と同様に虐殺の標的とされ、そこから生き延びたクバラン族には、二種類の運命が待ち受けていた。虐殺から逃れて南へ逃亡したグループは2002年に11番目の原住民族であると認定されたが、清朝の軍隊に投降して生き延びたグループは平埔族あるいは福佬人として認定され、今日に至っているのである。なお、平埔族というのは原住民族のうち日本統治時代に「熟蕃（漢民族への同化が進んだ蕃人）」と認定された人々の総称であり、当時も現在も法的には漢民族として扱われている。平埔族は近年、原住民族としての認定を台湾政府に求める裁判を行うなど、民族性の回復に努めている。

この二つの事件には、いずれも抵抗勢力の領袖に対して和議を持ちかけて宴席に招いた上で謀殺し、直後に和議の成立を信じた住民らに対して一方的な虐殺を繰り広げた、という共通点がある。その指揮を行なったのはいずれも鎮総兵の呉光亮であった。

港口部落を舞台とする映画『太陽の子』⁵⁾は現代のアミ族部落が舞台となっているが、その劇中にCepo'事件の記憶を祖父が孫に語り継ぐ場面がある。中国人の資本家が観光開発のために部落の土地を購入しようとしていることを知り、幼い孫に古老から聞いたCepo'事件の伝承を伝えて「漢人はかつて銃刀で我々を滅ぼそうとした。今、奴らは金の方で我々の土地を奪おうとしている」とアミ族としてのアイデンティティを論じていたのである。呉光亮は国民党政権下で「漢民族による台湾開闢の功労者」として顕彰されていたため、謀殺・虐殺の史実は長らく禁忌とされており、口承によって部族内で密かに語り継がれてきたという。つまり、政府の伝える歴史と異なる民族固有の口承の歴史が存在していることが描かれていたわけである。

その歴史が公になったことを示すのが上記の石碑で、2014年に建立されたものである。筆者はこの碑文の中に「これらの虐殺事件は日本軍の侵入が契機となって引き起こされたものだ」という記述を見つけ、衝撃を受けた。もしも牡丹社事件における軍事衝突が回避されていれば、琉球併合だけでなく、こうした台湾各地で発生した虐殺事件も起こらなかったという因果関係に初めて気づいたのである。

日本軍の侵入によって清国政府が危機感を抱く前の台湾は、福建省や広東省からの移民たちが多く暮らす西側の平野部と、原住民族が暮らす中央山地から東側海岸部に至る地域に截然と分かれており、面積的にはほぼ半分ずつに住み分けられていた。清朝政府は相互の領域を侵犯することや漢人と原住民族の通婚を禁じ、両者の隔離を促した上で漢人居住地域のみを統治の対象としていたのである。先述の「化外地」発言は、そのような事情を述べたもので、そこには伝統的な“華夷秩序”意識が反映されていた。

西側の平野部に居住する漢人社会の内部においても統一社会の形成は進んでいなかった。^{ホーロー}福佬（閩南）系と客家系の対立が根強くあり、械闘と呼ばれる集団的対立が頻繁に行われていたし、更には閩人同士の間においてさえ、水利などを巡って出身地域ごとの対立が暴力を伴う形でしばしば勃発していたのである。また、清朝の統治に対しても、1721年の「朱一貴の乱」、1787年の「林爽文の乱」などの大規模な反逆事件が繰り返されており、まさしく「三年一小亂、五年一大亂」⁶⁾という状況だった。

中央部と東部に居住する原住民族も相互に言語が異なっていて固有の居住地域内で暮らしており、お互いの交流が少なかっただけでなく、しばしば民族間の戦闘が行われていた。同一民族内においても血族を中心とした小集団に分かれて狩猟採集と農耕を営んでおり、時には民族内部の抗争も見られ

5) 『太陽の子』はレカル・スミと鄭有傑の共同監督による、実話をもとにした映画作品である。2015年に公開され、現代の原住民部落の状況をリアルに描いていることが話題となり、民族衣装を着て映画を見に行く原住民が続出する等の社会現象を引き起こした。同年の台北映画祭で観客賞を受賞し、沖縄をはじめ日本各地でも公開された。

6) 19世紀の清の官僚で福建按察使を務めた徐宗幹による描写。内乱が多く、清朝の統治力が及んでいない台湾の状況を端的に示した表現として広く知られる。

た。頻繁に移住を繰り返していたこともあり、20世紀に至るまで広域社会の発生を見ることはなかったのである。

清国政府は牡丹社事件に関する一連の交渉を通じて日本政府に領土拡張の野心があることを悟り、日本の圧迫に対抗するために当時確立されていた漢人居住地と蕃人居住地の境界線を破って軍隊を侵入させたのであるが、原住民族の抵抗を抑えきれず、けっきょく台湾全土の制圧には至らなかった。その後、初めて台湾を積極的に統治するための行政的な措置として1885年に台湾省を設置した。台北府・恒春県・埔里社庁・卑南庁などを設け、欽差大臣の沈葆楨を派遣、台湾全土を清国の直轄領とするために原住民族居住地域を清朝の版図に組み入れようと画策し、同時に鉄道の敷設等それまでおざなりだったインフラの整備に着手し、支配体制の構築を試みたのである。

しかし、このようにして台湾省が直轄領として経営されたのは僅か10年の期間に過ぎず、その試みは広域社会としての台湾が形成されないうちに日本政府の前に放擲されたと言えるであろう。

台湾は日本に併合されたことによって初めて広域社会が形成され、人々の生活に急激な変化を迫られたのである。その経緯は決して順調に推移したとは言えない。

2. 日本統治時代の琉球と台湾

同時代の琉球では、1879年に沖縄県が設置されてすぐに県民に対する日本語教育が始まったのであるが、当時の就学率は極めて低かった。沖縄県民の多くが日本への帰属意識を持つようになるには、その16年後の日清戦争の結果を待たねばならなかった。すなわち、台湾の領有が沖縄県民に対して日本人意識を喚起させる契機となり、台湾人に日本の国語を教える立場に立つことで日本人としてのアイデンティティを育てるという過程が始まったというわけである。

下関条約を結んだ李鴻章は、養子の李経方に命じて日本への台湾割譲の手続きを行わせた。朝鮮半島の利権争いとして勃発した日清戦争は、満州族の故地である中国東北地区から日本軍の目をそらせるために戦火とまったく無関係だった台湾を犠牲にすることで妥結したのであるが、台湾の漢人社会はこれに憤慨して「台湾民主国」を立ち上げ、欧米列強に独立の承認を求めていた。不穏な状況を察した李経方が台湾の土地を踏むことなく基隆沖の船上で割譲の手続きを済ませて早々に立ち去ったという事実は、当時の清国と台湾の冷やかな関係を象徴している。

上陸した日本軍に対し、台湾民主国を支援する人々は武装勢力を組織して抵抗したものの、彼らが介入を期待した欧米列強からの支援を得られないまま無残に瓦解した。日本軍は半年をかけて台湾の北部から南進し、西海岸沿いの平野部を武力制圧したのである。

漢人組織による武装抵抗をひとまず抑えた時点で軍政が民政に改められ、台湾総督府が設置された。原住民族に対しては、従来通り隘勇線⁷⁾を挟んで対峙し、時間をかけて徐々に追い詰める方針が取ら

7) 隘勇線は先住民族の住む山地を砦と柵で包囲して閉じ込めるために設けられた境界線で、隘勇と呼ばれる武装兵士が駐在した。清朝が設置し、日本統治時代を通して維持された。

れた。第四代総督・児玉源太郎（在任1898-1906）は着任当初「蕃人は絶滅させる。我々が必要なのは山林資源と鉱物資源だ」という持論を展開していたが、のちになって山岳地帯での労働力として彼らを利用するほうが役に立つと考えを改めた。児玉の後任となった第五代総督・佐久間左馬太（在任1906-1915）は「五箇年理蕃計画」を推し進め、軍事作戦を重ねた末に狩猟民たちから銃器を押収し、彼らの土地を接収した。

総督府は漢人居住地域、及び蕃人居住地の重要地点に公学校を設置し、日本語を国語として教える方針を推し進め、辺境の蕃人居住地域には蕃童教育所を設置した。やがてそれらは台湾全土を覆うに至った。公学校の教師には資格試験が課されたが、蕃童教育所で日本語を教えたのは日本人の巡査であり、教員としての資格がなかっただけでなく、教育者として育成される機会もなかった。辺境の蕃地では、高等教育を受けていない巡査が超法規的な権限を持ち、教育・法律・行政を恣意的に運用することが慣例化していたのである。

このようにして、台湾は沖縄と同様に日本に支配され、住民の全てが日本人になるように教育された。その結果、台湾全土に初めて共通の言語や法律、行政システムがもたらされ、交通や通信などのインフラ、医療・教育などが整備されるようになった。

明治政府は牡丹社事件から軍事制圧に至る一連の事業を「台湾処分」と名付けた。この名称には、それが「琉球処分」と相関して推し進められた計画であることが刻印されていると言えるだろう。

このようにして、琉球と台湾の住民たちは類似した運命の道をたどり、大日本帝国の臣民として20世紀を迎えたのである。

3. 沖縄と台湾を繋ぐ人脈

次に、沖縄県における日本語教育の普及について、又吉2018を参照しつつ整理する。

台湾より16年早く日本領に組み込まれた沖縄県では、1880年に「会話伝習所」が設置されて「普通語」⁸⁾の指導が行われた。これは、当時の日本と琉球の間には通訳が必要とされるほど言語の隔たりが大きかったため、統治に役立つ即戦力を育成するためにとった措置であるとされており、旧学校の生徒の中から選抜した会話伝習生に対し一日あたり5銭の弁当代を支給して、人材の育成に当たったという。

会話伝習所は同年のうちに師範学校に合併され、引き続き日本語教育が実施された。師範学校では会話伝習生に加えて県内の各地域から強制的に生徒が集められ、89名が入学した。そこで使用された教材『沖縄對話』は沖縄語と日本語が対置されたものであり、内地出身教師は沖縄語を解さないまま機械的に普通語を暗記させていたようである。

沖縄県における日本語教育はそのようにして始まり、1880年から各地に小学校が設立されたが、金品の供与など様々な優遇にもかかわらず就学率は低く、1884年の時点で2.47%に過ぎなかった。それ

8) 「国語」ではなく「普通語」と称しているのは、当時はまだ「国語」という呼称が定着していなかったことが理由であると思われる。

が、台湾処分後の1898年には就学率が41%に上昇し、日露戦争後の1906年には9割を超えたところをみると、この時期に「日本人意識」が急速に普及して一般化するようになったものと言って良いだろう。

この時期、明治政府が推進した同化教育の中心的役割を担ったのが沖縄師範学校であり、中でも第7代校長・相良長綱と第9代校長・児玉喜八の両者は国家主義的な教育を強権的に進めた人物として知られている。

相良は1886（明治20）年に沖縄師範学校の校長となり、学務課長を兼任した。着任後すぐに県内各地を精力的に巡回視察し、同年に公布された師範学校令に基づき国家に対して忠良な人材を育成すべく軍隊式教育を推進した⁹⁾。その後、1895（明治28）年から台湾総督府に勤務し、伊沢修二とともに芝山巖学務部本部で「土語」の研究や普通用語、軍隊用語の会話書などを編集した。芝山巖事件¹⁰⁾の際には恒春の支庁長に任命され赴任していたために難を免れたという。恒春では撫墾所長、国語伝習所長などを兼任し、台湾で最初の蕃童教育所を開設して「生蕃」教育に携わった。相良はまた、台東国語伝習所長も兼任しており、そこには後述する二人の沖縄人教師（東恩納盛篤と桑江好孝）が1901（明治34）年に着任している。

松田1999によれば、相良が原住民部落の猪勝東社^{チロシ}¹¹⁾に伝習所を開設することができた背景には、パイワン族の首領の一人で日本軍出兵の際に西郷従道に協力したJagarushi Guri Bunkieの影響力があったという。Jagarushi Guri Bunkieは牡丹社事件の際にパイワン族18社のうち16社を説得して西郷が率いる日本軍に敵対しないよう取りまとめた功績で頭角を現した。彼の説得に応じなかった高士佛社と牡丹社の2社だけが孤立して日本軍との戦闘に追い込まれたのである。琉球漂流民に最初に関与したのは高士佛社であり、牡丹社は後に関わったのであるが、Jagarushi Guri Bunkieと対立して戦闘の中心的勢力になったことから、一連の出来事が「牡丹社事件」と総称されるようになったというわけである。

Jagarushi Guri Bunkieは、日本軍の撤退後、清朝の求めに応じて台湾防御のために恒春城の建設に当たったことを嘉されて潘という姓を下賜され、以後、潘文杰を名乗るようになった。彼は西郷従道からも清朝からも褒賞され、のちの日本統治時代に勳六等瑞寶章を叙勲されるなど、日本の侵入を契機に勢力を拡大し、台湾南部の有力者として君臨した人物である。屏東だけでなく、広きにわたって影響力を誇示しており、台東での国語伝習所開設についても彼の貢献が大きかったという。

児玉は1890（明治23）年に沖縄県尋常師範学校校長兼沖縄県尋常中学校長となった。兵式訓練の強化に努め、日清戦争の際には中学校や師範学校で義勇隊を組織するなど国防意識・愛国思想を強調し、「沖縄の学生には国語を教えれば沢山で、英語を教えることは余計なことだ」などと公言していた。その教育方針が批判を浴び、日頃の沖縄出身者を見下す発言の末に学生によるストライキ事件を引き起こ

9) 松田2004は「明治政府が沖縄統治と台湾統治を連動して行っていたことはよく知られていることであるが、相良長綱はまさにその『標本的人物』であった」と述べている。

10) 同本部が武装勢力に襲撃され、6名の教員が殺害された事件。生命の危険を顧みず治安の悪い土地に赴任した彼らの運命については、その後、台湾で教育に従事する者たちの手本として「芝山巖精神」と呼ばれるようになった。

11) 現在の屏東満州里徳村。潘文杰の出身地である。

したことから1896（明治29）年に解任され、台湾総督府の学務部に赴任した。

相良も児玉も元は薩摩藩の軍人で西南戦争に従軍していたこと、愛国精神の注入に努め軍隊式教育に傾斜していたこと、そして離任後は台湾総督府の高官として台湾における日本語教育を牽引したことなど、多くの共通点がある。

彼らのこのような人事異動を実現させたのは、1892（明治25）年に沖縄県知事に就任し、16年の長きにわたって強権を振るって「琉球の帝王」とまで呼ばれた奈良原繁であろう。奈良原は沖縄県私立教育会の総裁を兼任し、沖縄県の教育界においても強力な指導力を発揮していたのである。

沖縄県私立教育会は奈良原の指導の下、機関誌『琉球教育』を通じて日本への同化と台湾への進出を促し続けた。例えば、1896（明治25）年の第3号には師範学校の卒業式の訓示として示された「沖縄の子弟は帝国の新たな南門の鎖鑰となった台湾において、国の屏障としてその有事に当たる重責を担っている」という児玉校長の言葉が掲載されている。『琉球教育』はその後も「沖縄の教員たるもの台湾進出に協力すべきである」という立場で台湾情報を発信し続けた。

これら三名はいずれも薩摩藩の出身であり、維新後も引き続き薩摩閥出身者が沖縄への影響力を行使していたことを示唆している。また、初代総督・樺山資紀が薩摩出身だったため、この時代の台湾では「薩摩人ならば人物才能の如何を顧みず、無理に採用させる」という風潮があったことから、恣意的な人事異動が可能であったものと思われる。

沖縄での日本語普及と同化教育を推進してきた相良・児玉の両氏が共に台湾総督府で教育事業を推進することになったのは偶然ではなく、沖縄で展開した同化政策を台湾でも同様に推進することが期待されていたのであろう。そして、その先鋒を担うべき日本語教師という人材の多くを、自らの影響力の及ぶ沖縄から供給しようと彼らが考えたとしても不思議ではない。

このような経緯により、台湾で現地の人々に日本語を教えた教師たちの中には、沖縄出身者が数多く含まれていた。新しく日本語を学んだばかりの沖縄人たちが、台湾では日本語を教える側として活躍したのである。安村2014の資料を見ると、台湾人に日本語を教えた沖縄人教師の数は約1000人にもなっている。

4. 辺境で活躍した沖縄人教師

日本の植民地となった台湾には、日本人児童が通う「小学校」と、地元民の児童を対象とする「公学校」が作られた。「小学校」は都市部にあるエリート養成所で、「公学校」は現地の子供たちを日本人に対して従順であるよう指導する機関という位置づけだった。この資料を見ると、沖縄人教師のほとんどが「公学校」に勤務しており、しかも政情不安で未開発の地域に赴任した人が少なくないということがわかる。

例えば、東恩納盛篤と桑江好孝はともに1901（明治34）年に台東国語伝習所に赴任し、久場政用は

同じ年に澎湖島に送られている。東恩納は太巴塲社^{タバラン}₁₂から蕃薯寮公学校へ転任し、桑江は璞石閣社の伝習所に勤めた後、澎湖島の三つの公学校を歴任した。当時の東海岸は交通が途絶していたし、澎湖島も本島との連絡が容易ではなかった。植民地支配が始まったばかりのこの時期に、日本人がほとんどいない僻地で暮らすことは文字通り命懸けだったと言える。

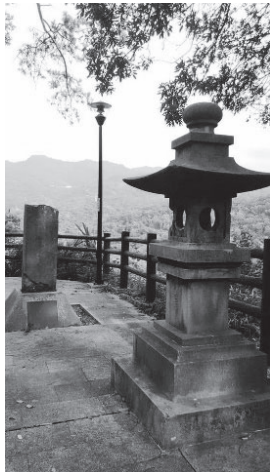
牡丹社事件の当事者として日本軍と戦闘を行なった高士佛社にも、1928（昭和3）年に勝連盛章が、1938（昭和13）年に仲間秀夫が、それぞれ着任している。琉球漂流民を最初に保護した高士佛社は西郷従道の軍によって家屋や財産を全て焼かれ、そのせいで多くの老人や子供たちが命を落とす結果となったが、戦闘を免れて避難した人々が別の場所に部落を再建していたのである。右上の写真₁₃に1914（大正3）年に撮影された高士佛社の人々の姿が見えるが、既に日本への帰順が進んでいるらしく、子供たちがお揃いの学帽をかぶっている様子が窺える。



東恩納盛亮は1904（明治37）年に北埔公学校に赴任したが、そこでは、その3年後に抗日武装勢力によって市庁舎が襲われ57人の日本人が殺害されるという「北埔事件」が起きている。北埔は19世紀

半ばごろまでサイシャット族の居住地であったが、漢人の開拓団が武力抗争の末に土地を奪い、その直後にやってきたのが日本人というわけであり、北埔事件は漢人とサイシャット族が連合して新興勢力の日本への逆襲を試みたという図式となっている。北埔ではその後、客家を中心として茶の栽培が盛んになり、現在では「東方美人茶」の産地として栄えている。

台南庁の噍吧哖公学校には1906（明治39）年に仲田朝由、1913（大正2）年に伊芸文英がそれぞれ着任しているが、ここは



北埔の公園内にある北埔事件の記念碑。
上半分は国民党統治時代に破壊された。

12) 地名に「社」がついているのは、それまで漢人が立ち入ることのできなかった原住民部落であることを示す。タバランもポシコも原住民族によって名付けられた地名であり、太巴塲及び璞石閣というのは中国語の類似した音が当てられた漢字表記である。タバランは現在アミ族の伝統文化を熱心に継承していることで知られている。ポシコ社の現在の地名は花蓮県玉里で、かつてはアミ族、ブヌン族、シラヤ族及びクバラン族の交差地帯だった。その後、多くの客家がここに移住した。

13) 秋恵文庫 Formosa Vintage Museum より許可を得て転載。これ以外の写真は全て筆者が現地でも撮影したものである。

1915（大正4）年に日本人95人が殺された抗日武装蜂起「西来庵事件」場所として有名である。「タバニ」はおそらく原住民族が使用していた地名であろうが、忌まわしい記憶を消すためか、事件後に「玉井」と改められている。玉井は近年台湾最大のマンゴーの産地として知られている。

漢人によって漢字地名を与えられる機会さえなかったほどの辺境地域にも、多くの沖縄人教師が赴任している。例えば、1923（大正12）年に花蓮港カシン社ターフンの^{ターフン}打訓尋常高等小学校に着任した仲順守繁である。もちろんここも原住民部落であり、標高3200mの峠を越えて開通された道によってようやく日本の統治が及んだばかりの土地であった。ここでは駐在所が襲撃され日本人警察官が殺害されるという事件が¹⁴⁾があった。この事件は1915年（大正4）に連続して発生し、合計30名近い日本人が殺されたのであるが、仲順はその場所に作られた学校に、事件の8年後に着任したのである。

1925（大正14）年に高雄州屏東郡トクブン社の^{トクブン}徳文公学校に赴任した与儀喜康は1935（昭和10）年までそこで教えた。徳文はパイワン族とルカイ族が暮らす山間の小部落で、コーヒー栽培が有名である。ここは筆者が訪れたいと願っている場所の一つであるが、交通が極めて不便なためにいまだに果たせず、大きな谷を隔てた霧台という部落から撮影することしかできなかった。下左の写真の中央奥に見えているのが現在の徳文集落である。



下の写真は霧台部落。右方向に左写真の風景が広がる



与儀はその後、潮州郡蕃地シタウ社の内獅頭公学校などを経て、潮州郡蕃地スボン社の^{スボン}率芒公学校の校長（兼任）になった。学校の住所が「蕃地〇〇社」とカタカナで記されている地域を繰り返して転任したのは極めて稀なケースである。なお、シタウ社の内獅頭公学校には1933（昭和8）年に阿波連本祐も着任しており、スボン社の^{スボン}率芒公学校には1937（昭和12）年に伊江大城全良が、その翌年には有銘興登が、それぞれ着任している。

14) ^{ターフン}打訓事件または^{ターフン}大分事件と呼ばれる。ターフンは清朝の兵士が1875年に八通關道を開き駐屯地を造って漢人に開墾を奨励したものの、原住民などの抵抗が激しかったため放棄されていた地域である。日本統治時代になってブヌ族の連携を遮断するためそこを再び開拓したところ、駐在の日本人警察官が襲撃され殺害される事件が連続して発生したのである。

沖縄と同様、台湾にも数多くの離島があり、そこにも多くの沖縄人教師が着任している。マグロ漁で有名な東港の近くに小琉球と呼ばれる小さな島があるが、儀間千代子はその琉球公学校で1937(昭和12)年から三年間勤務した。東海岸のはるか沖合に浮かぶ離島の火焼島¹⁵⁾には、宮里喜一と砂辺善良が着任している。

このほかにも、台東庁の馬武窟公学校に赴任した古波蔵保昌と古堅厚永、都蘭公学校と知本国民学校に赴任した仲村渠盛秀、太麻里公学校の宮城安松、東埔蚋公学校の玉城仁盛、新垣良伸、玉那覇俊子ら、数えきれないほどたくさんの沖縄人教師が辺境の地で活躍している。これらの地域は、今もアミ族・プマ族・パイワン族・ブヌン族などの原住民が暮らしていることで有名である。Cepo'事件の発生地であり、映画『太陽の子』の撮影現場となった港口の公学校にも、仲宗根吉次郎・座喜味盛良・長田辰雄ら三名の沖縄人教師が赴任している。

当時、沖縄人の地位は「日本人より下、台湾人より上」と見なされていた。そのため、「同じように日本人から虐げられている仲間」として台湾人と良好な関係を築いた人もいたし、逆に台湾人に対して必要以上に威張りちらして嫌われた人もいたという。

1927(昭和2)年から1930(昭和5)年まで台中州能高郡パーラン社の霧社公学校に勤めた平良長三郎は前者だったと思われる。彼はここで最も有名な抗日武装蜂起「霧社事件¹⁶⁾」に巻き込まれながらも、無事に生き延びたのである。この事件では運動会のために学校に集まっていた日本人が包囲・襲撃されて134名が殺された。たまたま和服を着ていたせいで日本人と勘違いされて殺された漢人の事例を除くと、日本人以外は誰も危害を加えられておらず、日本人植民者のみを標的とした計画的蜂起だったとされている。



霧社公学校跡地に立つ霧社事件の説明版



霧社事件を生き延びたセデック族の「余生記念碑」

15) 火焼島は現在、緑島と呼ばれている。蒋介石政権下で政治犯の収容所が置かれたことで有名な島である。

16) 事件前の霧社の人口は2178名で、在住の日本人は157名、漢人は111名であった。それまで理蕃の成功例として称賛されていたこの地域で、1930年10月27日、ロード社、ホーゴ社、スーク社、ボアルン社、タロワン社、マヘボ社の六部落が武装蜂起し、運動会のため小学校に集まっていた日本人を無差別に殺害した。日本側はその報復として軍隊1303名、警察隊1305名、官役人夫1563名を動員し、戦闘機や毒ガスなどの最新兵器を使用して敵の殲滅を図った。一か月余りにわたる戦闘の結果、蜂起藩の住民は1236名のうち戦死者85名、飛行機による爆撃の死者137名、味方藩奇襲隊による首狩り犠牲者87名、自ら首をつった者290名という犠牲を出した末に投降した。更に、武器を捨て保護されたはずの生き残り住民を惨殺した「第二霧社事件」の犠牲者が263名あり、余生を得たのはたったの298名であった。帰順式の後にも、事件への関与を疑われた39名が逮捕・抹殺されたことから、日本人とセデック人による民族同士の殲滅戦であったことが窺える。

筆者は平良が「自分たちと同じように差別されている沖縄人」と見做されていたおかげで生き延びることができたものと推察している¹⁷⁾。平良はその後、員林公学校に転出した。

員林は石垣島のパイン産業を支えた台湾人たちの故郷である。員林には1922（大正11）年に員林尋常高等小学校に着任した嵩原恵重から1944（昭和19）年に員林東国民学校に着任した山里宗重まで、合計14名もの沖縄人教師が赴任しており、石垣へのパイン農家移住との関連性があった可能性を推測できるものの、現時点ではその裏付けは確認できていない。

4. まとめ

ここまで、主に沖縄出身教員と原住民族居住地域を中心に『日本統治下の台湾と沖縄出身教員』の資料部分を読み解いた。同書に記録されている膨大な資料からは、ほかにも「台湾における近代教育の普及」「女性の社会進出の進展」「地名や校名の変化から読み取る皇民化の進展」「沖縄人の人名が傍証するヤマトウ化」など、様々な読み解き方が可能であり、本稿で示した内容はその可能性の一部を示唆したにすぎない。

本稿で紹介した教師たちとは別に、山間の小さな原住民部落に設置された小規模な「蕃童教育所」でも日本語が教えられていたが、先述のとおり蕃童教育所では教員としての資格を持たない巡査が教師を兼ねていたため、安村2012の名簿には含まれていない。

同書のデータには、台北帝国大学（現在の台湾大学）や日本人向けの小学校・中学校・高校等に勤務した沖縄出身の教師も含まれている。しかし、彼らの主たる任務は「台湾在住の日本人に対する教育」であって「台湾人を対象とした日本語教育」ではないため、本稿では扱わなかった。

同時代の台湾には、教師のほか警察と鉄道関係で活躍した沖縄人が多かった。また、台湾各地の港に沖縄出身者の漁師部落が形成され、現地の人たちに先進的な漁法を伝えたとされており、その活躍を顕彰するために基隆に「琉球海人の像」^{ウミンチュ}が建てられている。こうした分野における沖縄県出身者の状況についても、いずれ資料を収集して整理、報告したい。

参考文献

- 高加馨（里井洋一訳）2008『Sinvaudjan から見た牡丹社事件』琉球大学教育学部紀要 72
平野久美子 2019『牡丹社事件 マブイの行方』集広舎
又吉盛清 2018『大日本帝国植民地下の琉球沖縄と台湾』同時代社
松田吉郎 1999『台東国語伝習所について』学校教育研究 第11集 兵庫教育大学
松田吉郎 2004『台湾原住民と日本語教育』晃洋書房
安村賢祐 2012年『日本統治下の台湾と沖縄出身教員』大里印刷

17) 霧社公学校には平良が着任する前の1921（大正10）年に勝連盛誠が校長として着任、翌年には勝連盛仁が教員心得として着任しており、平良の離任後の1939（昭和14）年には喜友名朝順が校長として着任しているが、いずれも霧社事件とは直接の関わりがなかったものと思われる。

